

岩戸山古墳出土・表採資料の検討

足達 悠紀

九州大学地球社会統合科学府博士後期課程：〒819-0395 福岡市西区元岡744

要旨：玉泉館旧蔵資料のうち、福岡県八女市に所在する岩戸山古墳から出土・表採された資料について報告した。当該土器類は横穴式石室の開口部付近から出土したと考えられ、所属時期は古墳築造後のTK10からMT85型式段階、一部はTK43型式段階にまで降る可能性がある。また、乗場古墳出土土器類との類似性から、須恵器の製作技法・器形を持ちながら焼成は土師質で小形の土器群が、筑紫君一族への供献土器として採用された可能性を指摘した。

キーワード：玉泉館旧蔵資料，資料報告，岩戸山古墳，須恵器，土師質の土器，埴輪

1. はじめに

岩戸山古墳は、福岡県八女市に所在し6世紀前葉に築造された前方後円墳である。「磐井の乱」の当事者である筑紫君磐井の墓として比定されていることや(森 1956)、豊富な石製表飾の存在などから、学史的に非常に著名な古墳として認識されてきた。

一方で、九州大学総合研究博物館に所蔵されている玉泉館旧蔵¹の岩戸山古墳出土資料の中には、詳細が報告されていないものが存在している。当該資料の中には、須恵器にみられる器形でありながら小形で土師質の土器が多数含まれており、岩戸山古墳における土器を用いた祭祀・土器の供献や、須恵器工人・土師器工人の関わりなどの点から鑑みても示唆に富む資料と言えよう。既に一部については樋口隆康氏や小田富士雄氏によって報告されているが(樋口 1958, 小田 1972)、本稿では玉泉館旧蔵資料の全体像を提示するために、未報告資料と既報告の資料についても合わせて報告することとしたい。

また、岩戸山古墳から出土した土器資料は、玉泉館旧蔵資料以外にも各地に散逸しており、本古墳に供献もしくは副葬された土器群の全容が把握されていないというのが現状である。こうした資料は散発的に報告・検討されてきたが(福岡縣 1925・1939, 齊藤 1955, 樋口 1958, 古賀 1959, 小田 1970・1972, 谷澤・岩永 2021)、各土

器を本稿で再提示することによって、岩戸山古墳から出土した土器について、現状で把握可能な資料を整理してまとめておくこととしたい。以上の報告をふまえ、本稿では土器群の年代的位置づけの検討と、乗場古墳出土例の検討などを通じた岩戸山古墳出土土器群の位置付けを行い、その他派生する議論への問題提起を行うこととしたい。

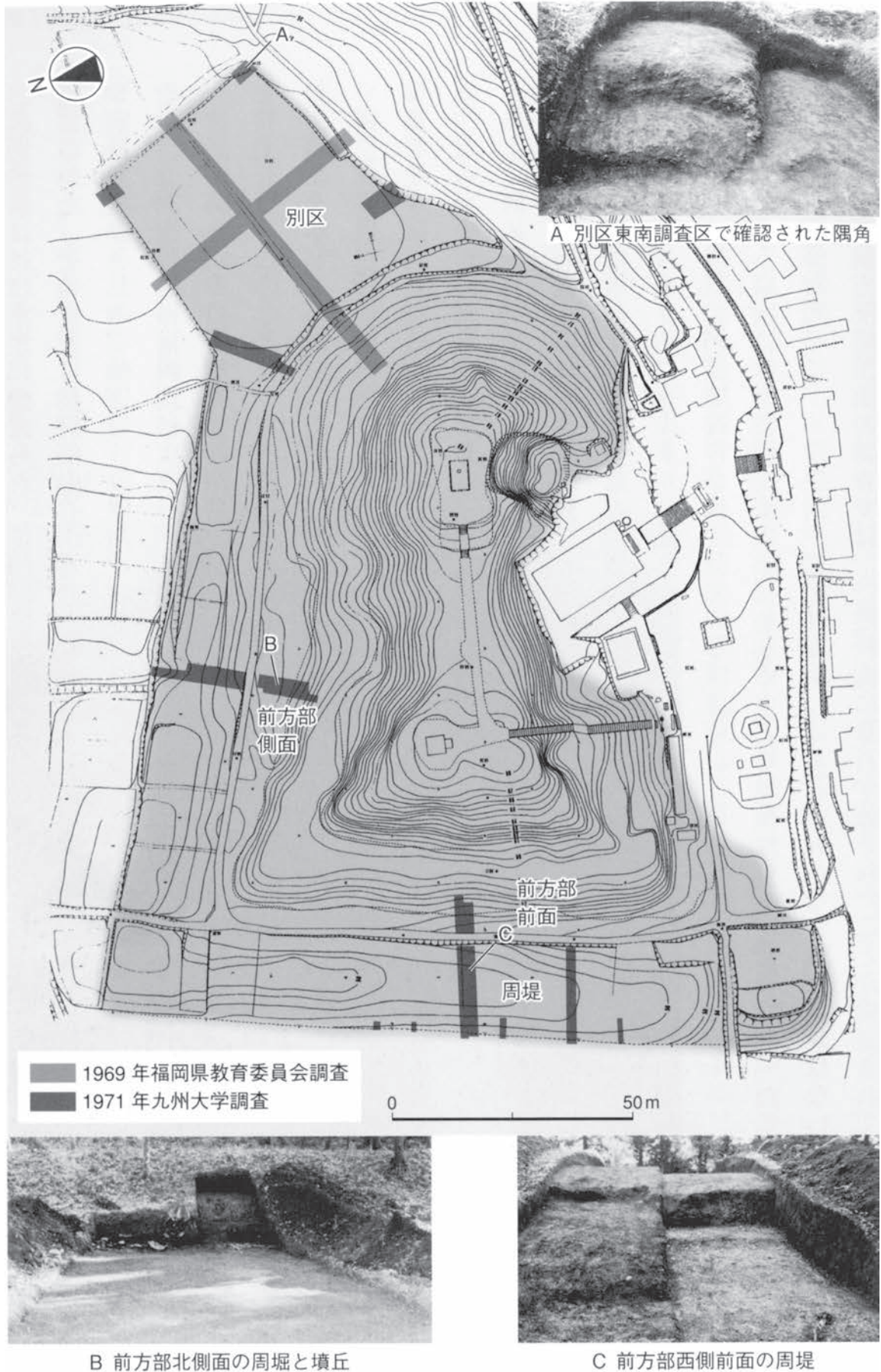
2. 岩戸山古墳とその調査史

(1) 岩戸山古墳の調査史

岩戸山古墳は福岡県八女市大字吉田字甚三谷に所在し、広川に沿って延びる八女丘陵の中央部に位置する前方後円墳である。磐井の乱を引き起こした筑紫君磐井がその被葬者に比定されており(森 1956)、築造年代が6世紀前葉と判明している非常に著名な古墳と言えよう。

本古墳は古くから着目されており、江戸時代後半期には後円部の墳頂部から石製品が2点出土したことが確認されている他、江戸時代末期には矢野一貞によって実地調査が行われ、氏が著した『筑後将士軍談』の中に墳丘絵図や石製品の絵図が掲載されている。

本稿に最も関わる調査・報告歴としては、1924年(大正13年)に行われた大神宮祠堂新築のための南側くびれ



第1図 岩戸山古墳の測量図・調査トレンチ (柳沢 2014)



【出典】 1：福岡縣教育委員会 1939 2・3：齊藤 1955

第2図 岩戸山古墳出土の土器①（福岡縣教育委員会 1939，齊藤 1955）

部テラスの地下げ工事が挙げられる。約1.2m掘り下げた際に、円筒埴輪4～5点、須恵器・土師器などの土器片が100余点、大甕・高坏・埴などが10数点、石人の破片が2点、石馬の破片と考えられるものが1点、槍身が1点発見され、いずれも表土から60～135cm程度下から出土したと報告されており（福岡縣 1925）、本稿で報告する土器群の来歴と性格を考える上で重要であろう。

その後、京都大学による九州の装飾古墳、石人・石馬研究の一環として、1938年には梅原末治・原田仁氏により岩戸山古墳の精密な実測図が作成された（梅原・小林 1940）。また、1932年の大場磐雄氏による踏査成果（大場 1948）などを踏まえつつ、1946年には鏡山猛・有光教一・森貞次郎・岡崎敬ら九州考古学会による調査が行われ、埴輪や石人・石馬の様相の詳細な把握や、別区の存在などが確実視されることとなる（九州考古学会 1951）。更に、1963年には集中豪雨の影響で墳丘が一部流出したため、波多野院三氏らが現地調査を行い、小田富士雄氏も加わって石製表飾などの検討が行われている（波多野・小田 1964）。

墳形や墳丘規模・構造を解明するための本格的な発掘調査としては、福岡県教育委員会による1961年の調査と、九州大学文学部考古学研究室と八女市教育委員会による1971年の調査が挙げられる（第1図）。当調査では別区や周溝、周堤などにトレンチが設定され、墳丘の規模や構造が明らかになった点で意義深い（八女市教育委員会 1972，柳沢 2014）。

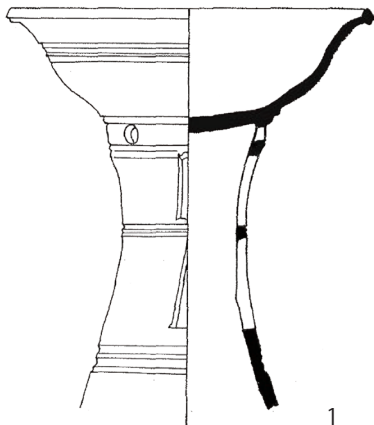
また、岩戸山古墳の主体部に関しては、発掘調査等は行われておらず未確認である。森貞次郎氏は、当該期の前方後円墳において、横穴式石室は後円部墳丘上部に位

置し、開口部が前方部を向くもしくは前斜めのくびれ部方向を向く例があることから、岩戸山古墳についても同様であると推定している（森 1977）。加えて、開口部がくびれ部方向を向くのであれば、1924年に南側くびれ部テラスから出土した土器群が墓前祭祀に使用されたものと捉えることができると指摘している²（森 1970，柳沢 2014）。1994・1995年に行われた岩戸山古墳の電気探査によって、横穴式石室は後円部中央付近に位置し、南西方向を向いている可能性が示唆された（水永 1996）。こうした調査成果を受けて、柳沢一男氏は「深度に多少の疑念があるが、南側くびれ部の一段目テラスに開口する可能性が高い」と述べている（柳沢 2014）。

（2）土器の報告に関して

1924年の地下げ工事の際に出土した遺物は、それらを収蔵する石人堂が立てられたが、第二次世界大戦直後に破壊され、人々によって持ち去られたようである³（小田 1970）。本稿で報告する玉泉館旧蔵資料の来歴については後述するとして、ここでは、各地に散逸した土器群のうち既に諸氏によって報告されているものについて整理し、現状で把握できる限りでの岩戸山古墳出土土器の全体像を確認しておきたい。なお、いずれも上記工事の際に出土したものである可能性が高いものの、出土地点が明確に報告されている資料はほとんど存在せず、確実に地下げ工事と関連するとは断言できない。

早くは島田寅次郎氏によって、地下げ工事の際に出土した黒漆の塗布された土師質直口壺が報告されている（第2図1）（福岡縣 1939）。また、齊藤忠氏が「古墳の封土からきわめて小型の土師質の台付高坏や壺の発見される



※縮尺不明

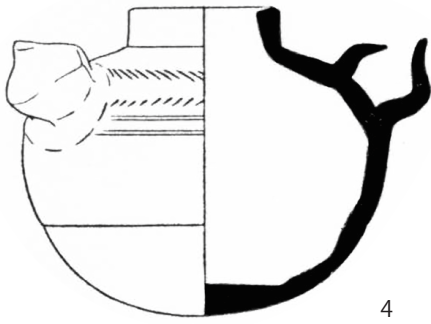
1



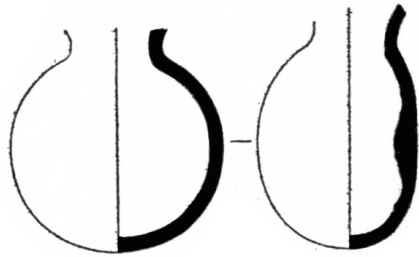
2



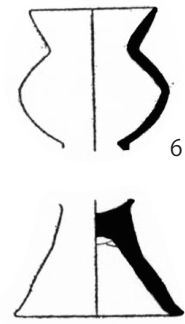
3



4



5



6

7



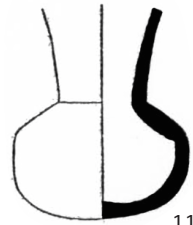
8



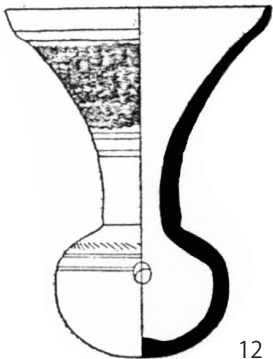
9



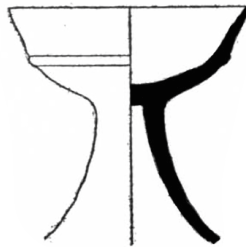
10



11



12

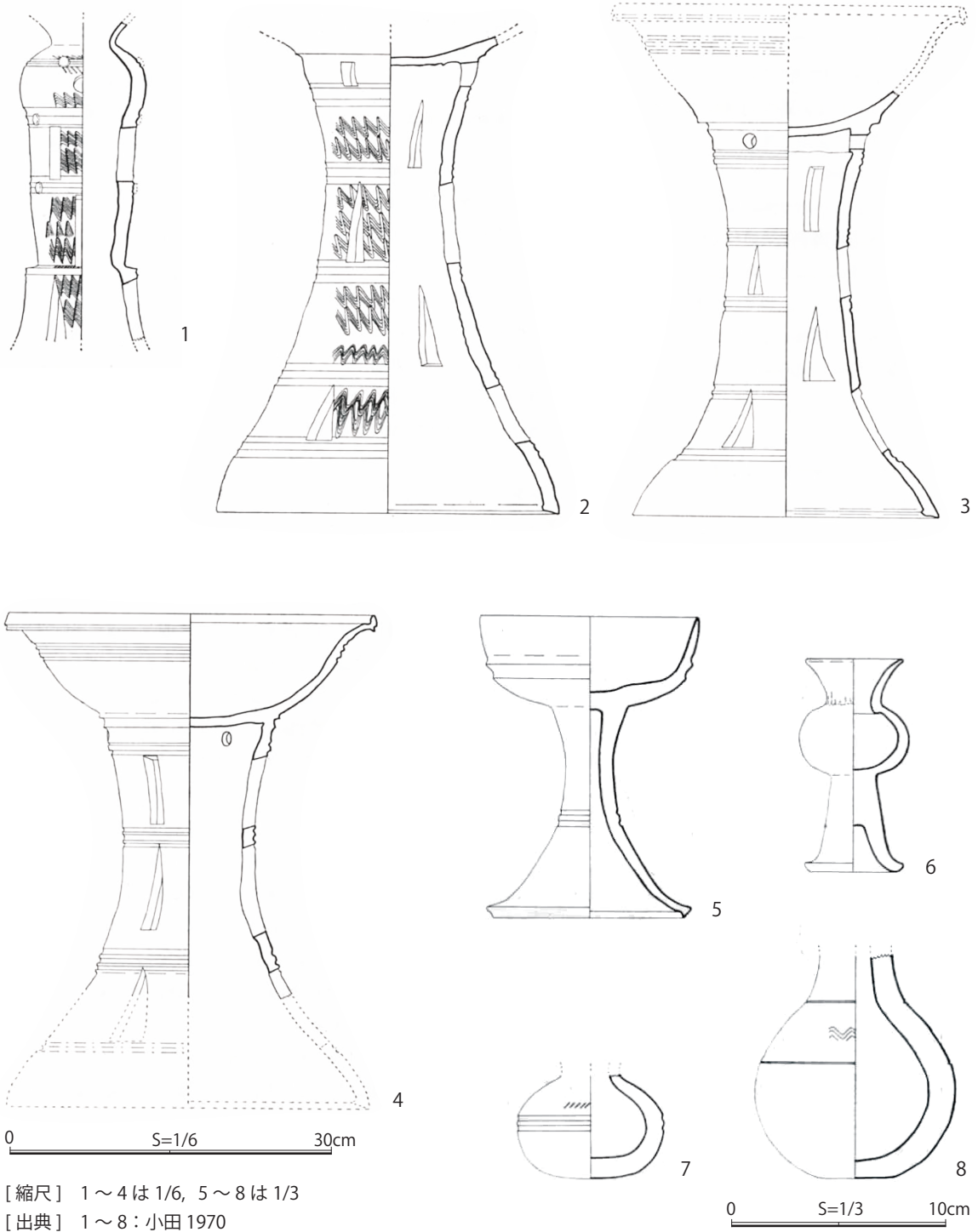


13

0 S=1/3 10cm

[出典] 1:樋口 1955 2・3:樋口 1958 4~13:古賀 1959

第3図 岩戸山古墳出土の土器② (樋口 1955・1958, 古賀 1959)

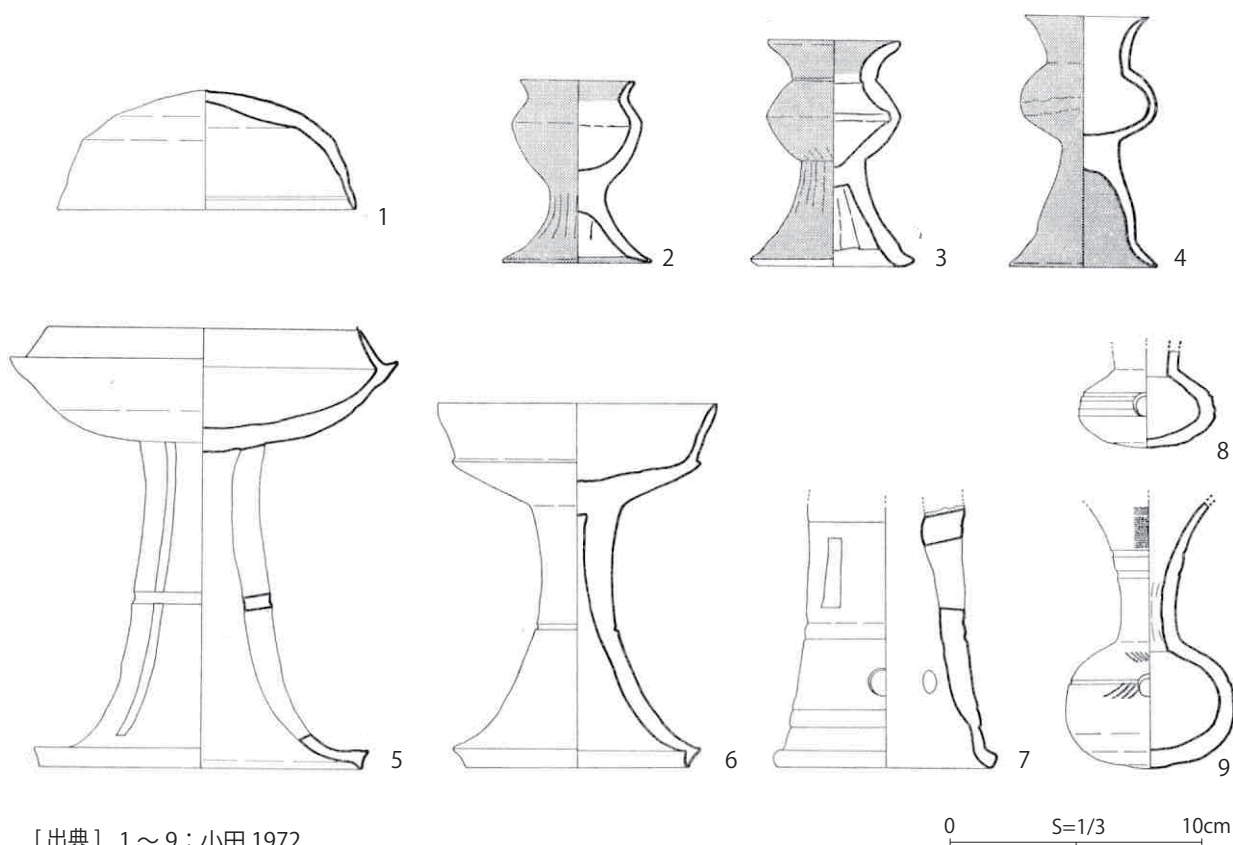


第4図 岩戸山古墳出土の土器③ (小田1970)

こともある」として、中島栄三郎氏蔵の岩戸山古墳出土提瓶と脚付壺(いずれも土師質)を紹介しており(第2図2・3),実用品ではなく祭祀の供膳具の一種であったと指摘している(齊藤1955)。

樋口隆康氏は、岩戸山古墳の築造時期が明確であるこ

とを評価し、岩戸山古墳出土須恵器が古墳や須恵器の編年を考えるにあたって重要であると指摘した。九州の須恵器をV期に大別する中で、本古墳出土の高坏型器台1点と(第3図1)(樋口1955),円柱状の筒部を有する須恵器筒型器台2点を紹介し(第3図2・3)(樋口1958),



〔出典〕 1～9：小田 1972

第5図 岩戸山古墳出土の土器④（小田 1972）

氏の編年上の第Ⅱ期に位置付けた。

更に、古賀寿氏は、岩戸山古墳出土土器群は未報告のものが多いことを問題視し、特に「通常の土師器や須恵器と異なり、両者の折衷とも見られる祭祀用の特殊な土器群」の存在を指摘した。氏は國學院大學考古学資料室に所蔵されている子持ち壺、提瓶、高坏、甗、脚付壺を紹介し（第3図4～13）、この中に須恵器の形態をロクロによって成形して土師器の焼成技法で焼成したものが多く含まれていると述べている。加えて、器形は須恵器と類似するものの若干の差異が認められることに言及し、須恵器工人と土師器工人の技術交流が積極的に行われていた可能性を指摘した（古賀 1959）。

各地に散逸していた土器群を集成し報告を行ったのは小田富士雄氏である（第4図1～8、第5図1～9）（小田 1970・1972）。報告された資料は、九州大学考古学研究室・福岡教育大学・小倉高校・岩崎光氏・福島高校・九州大学教養部が当時所蔵していたものである。氏は、器台や有蓋高坏、甗の特徴から、岩戸山古墳の年代から降る時期の資料が含まれることを指摘し、本古墳築造後

も土器類の供献が続けられていたと述べている（小田 1972）。なお、九州大学教養部に当時所蔵されていた資料は、「玉泉館」に旧蔵されていたものが移管されたものであり、現在は九州大学総合博物館が所蔵している。次項で報告する資料の中には、既に小田氏が報告したものが一部含まれており（小田 1972）、谷澤亜里氏・岩永省三氏も一部を紹介している（谷澤・岩永 2021）。

さて、上に示した土器群のうち、須恵器の器台（高坏型器台と筒型器台）に関しては、須恵器編年の年代的基準となる資料として重要視されてきた。岩戸山古墳が磐井の墓に比定されていることから、これらは6世紀前葉といった年代的位置付けが与えられている（樋口 1958、小田 1972）。諸氏によって器台の中にも型式学的新旧関係が存在することが指摘され、更にその年代的位置づけは議論のあるところであるが⁴（高橋・小林 1990）、本稿では、当該器台に関しては樋口氏のⅡ期、小田氏のⅡ期、陶邑編年のMT15型式段階（田辺 1981）、実年代は6世紀前葉という位置づけにならっておきたい。

3. 玉泉館旧蔵の岩戸山古墳出土土器・埴輪

本稿で報告する玉泉館旧蔵の岩戸山古墳出土の資料は、須恵器（有蓋高坏1点、器台2点、大甕破片1点）、土師質の土器（提瓶1点、甕3点、直口壺2点、長頸壺1点、器台1点、無蓋高坏1点、台付壺1点、脚付壺1点）、円筒埴輪片2点である。須恵器大甕片（第7図17）・土師質の甕1点（第6図4）・埴輪片2点（第7図15・16）については玉泉大梁氏による採集品であり、それ以外は大神宮神社からの寄贈品である。ただし、須恵器筒型器台（第6図13）に関しては、六本松図書館移転時のカードに「岩戸山?」と記載されていたものであり（谷澤・岩永2021）、資料の来歴の詳細は不明である⁵。

岩戸山古墳出土の土器資料は、先述した通り1924年（大正13年）の大神宮再建の際に、南側くびれ部テラスから出土したものと考えられる。玉泉氏が採集した資料のラベルには「大正13年11月29日」と記載されており、当該資料は1924年に出土したものを採集した可能性が高い（谷澤・岩永2021）⁶。また、大神宮神社寄贈資料についても、資料の当初の所持者が大神宮神社であったことを鑑みると、やはり南側くびれ部テラスから出土したとされる土器群と一連のものであろう。

なお、本項で「土師質の土器」と記載したのものには、ロクロ成形によって須恵器的な器形を形作るが、焼成や色調は土師器的であるものが多く含まれている。このような土器群は、須恵器の生焼け品や通常の土師器と区別するために「赤焼土器（高島・西1971）」もしくは「似非須恵土師器（橋口1982・1989）」と呼称されることがある。本稿では、名称の問題を避けるために、「須恵器とも土師器とも言い難いが器質としては土師質である」ということから、「土師質の土器」と呼称している。

1. 脚付壺（第6図1）

本資料は小田富士雄氏によって既に報告が行われている（小田1972）（第5図3）。口径5cm、器高9cmの脚付壺で、く字状に外反する口縁部と算盤玉状の胴部に、八字状に外に広がる脚台部を接合する。外面全体と口縁部内面に横方向のヘラミガキを施し、丹を塗布している。また、脚台部内面は縦方向のヘラケズリを行う。胎土は精良で浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

2. 台付壺（第6図2）

口縁部を欠損するが、胴部最大径5.9cm、残存高5.6cmの台付の小壺である。ただし、胴部下から脚台部にかけて一部付加的に粘土が付く部分があり、古賀寿氏が報告している小壺（第3図9）と同様に子持ち壺の子壺である可能性もある。球形の胴部をもち、肩部に刺突文をめぐらしている。脚台部はヨコナデ及びタテナデを施して胴部と接合し、胴部はヨコナデによって仕上げる。胎土は0.5mm程度の白色砂粒・角閃石を含むが精良で、色調は胴部が橙色、脚台部は浅黄橙色を呈しており焼成は比較的良好である。

3. 甕1（第6図3）

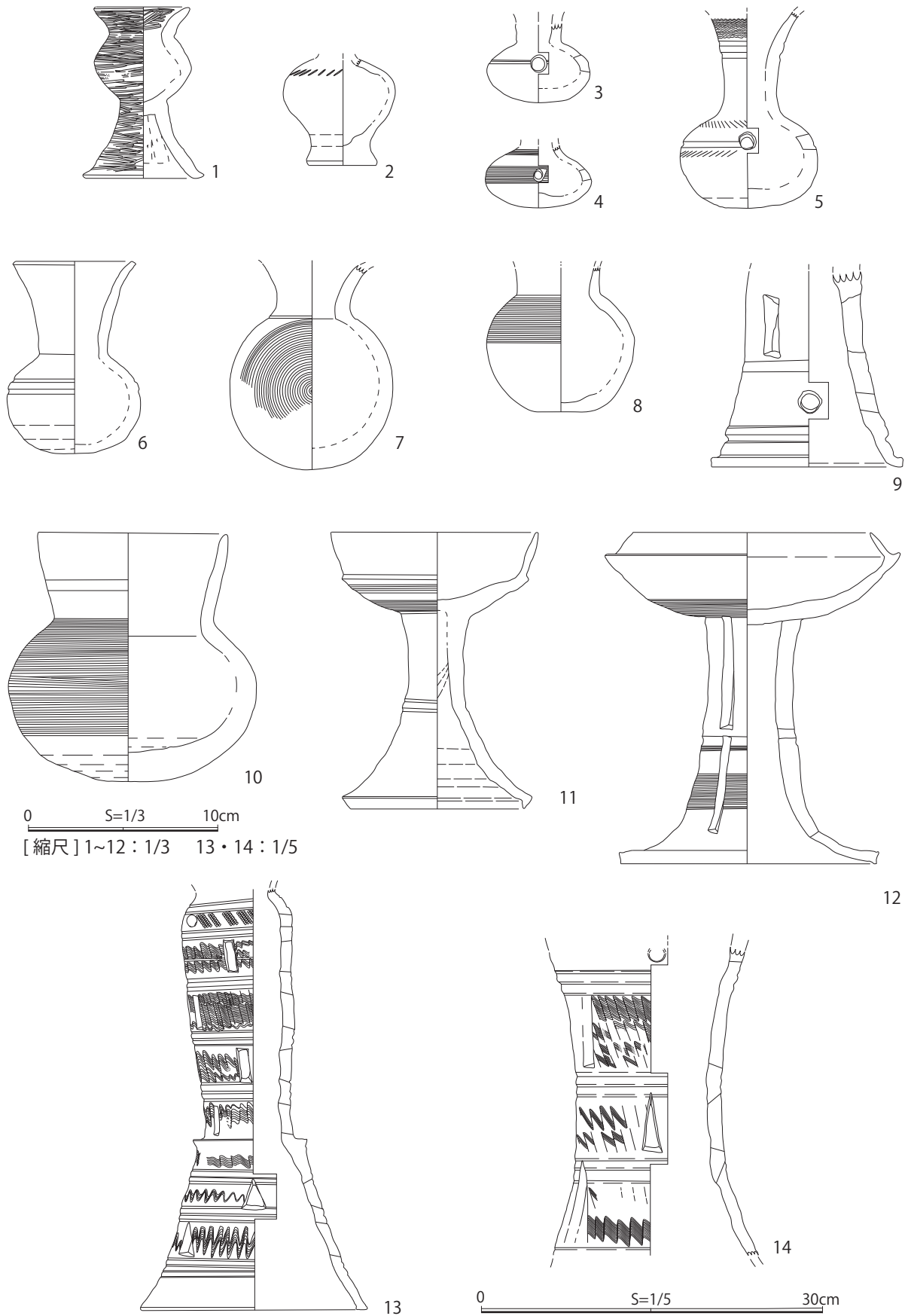
本資料も小田富士雄氏によって既に報告が行われている（小田1972）（第5図8）。頸部径2.4cm、胴部最大径5.8cm、残存高4.2cmであり、古墳時代後期に通有の須恵器甕よりも小形のものである。胴部は扁平な球形である。胴部中位に一条の浅い沈線をめぐらせ、一か所に9mm程度の円孔を穿つ。胴部に文様は施さない。底部外面は回転ヘラケズリを行い、それ以外は回転ナデによる調整を行う。胎土は0.5mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、焼成も良好で色調は橙色を呈する。成形はロクロを使用するが、焼成は土師器と同様であろう。

4. 甕2（第6図4）

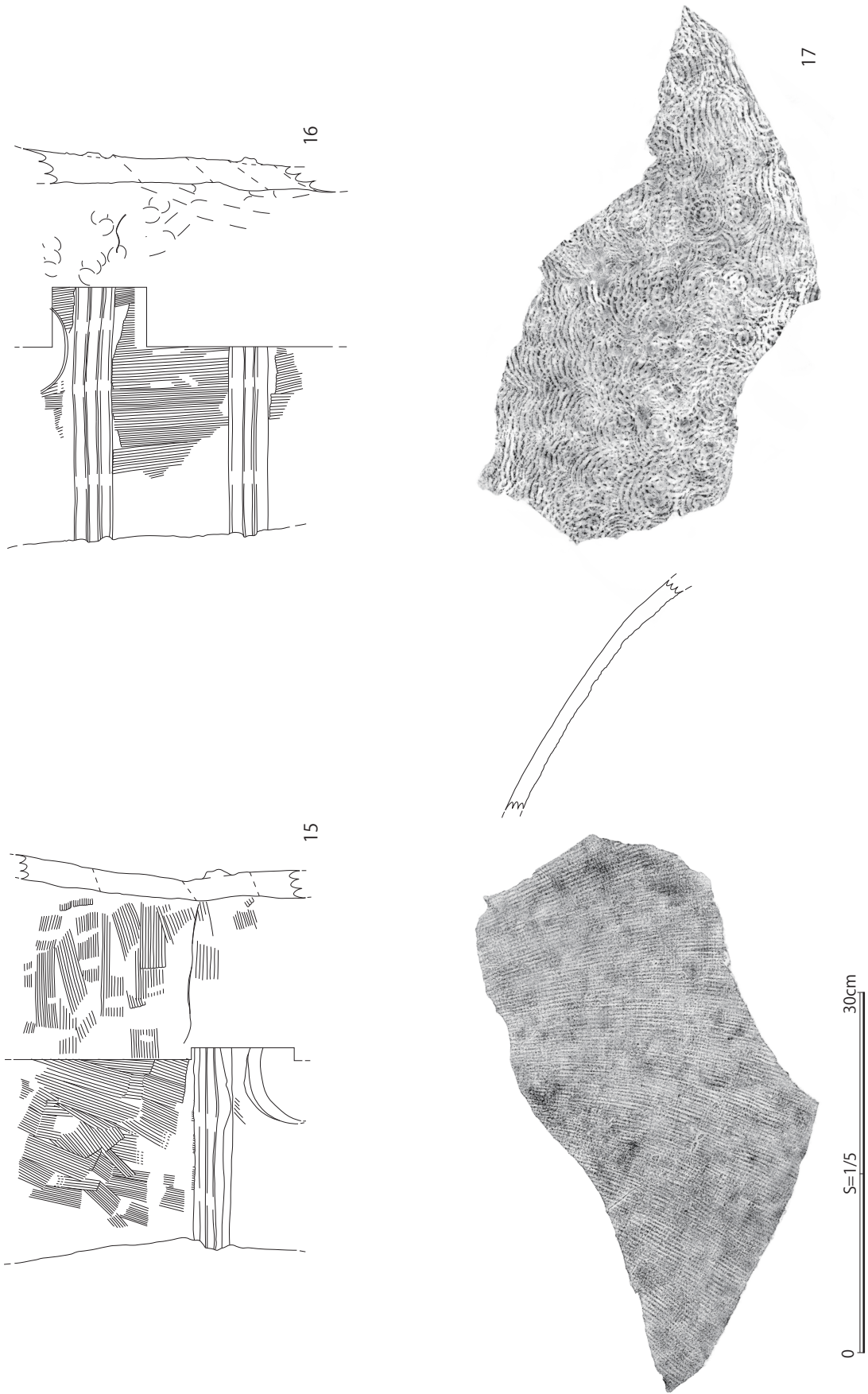
胴部のみ残存している。胴部最大径5.6cm、残存高3.3cmであり、古墳時代後期に通有の須恵器甕よりも小形のものである。胴部は扁平な球形である。底部外面はヘラギリ後ナデ調整を行う。胴部中位の一か所に直径5mm程度の円孔を穿つ。また、胴部中位及び頸部直下にはカキメ調整を施す。胎土は2mm程度の白色砂粒を含み、焼成は良好で色調は橙色を呈する。本稿で報告する資料の中ではやや粗雑な印象を受ける。成形はロクロを使用するが、焼成は土師器と同様のものであろう。

5. 甕3（第6図5）

本資料も小田富士雄氏によって既に報告が行われている（小田1972）（第5図9）。頸部径3.2cm、胴部最大径7.2cm、残存高10.4cmであり、古墳時代後期に通有の須恵器甕よりも小形のものである。頸部はゆるやかに外反しながら上方に伸び、上半部に2条の浅い沈線を施す。口縁部が欠損しているため形態は不明であるが、そのままゆるやかに外反するか、古賀寿氏が報告している甕と同様に（第3図12）口縁部で上方に折れ曲がる形態をも



第6図 玉泉館旧蔵の岩戸山古墳出土・表採資料①



第7図 玉泉館旧蔵の岩戸山古墳出土・表採資料②

第1表 玉泉館旧蔵の岩戸山古墳出土・表採資料の観察表

図版番号	挿図番号	登録番号	種類	器種	胎土	焼成	調整		色調	
							外面	内面	外面	内面
第6図	1	玉泉館1951	土師質	脚付壺	精良	良好	ヨコミガキ	ヨコミガキ・ナデ・タテケズリ	2. 5YR6/8橙(丹塗り)	2. 5YR6/8橙(口縁部丹塗り) 7. 5YR8/6浅黄橙
第6図	2	玉泉館745	土師質	台付壺	0.5mm程度の白色砂粒を含む 角閃石を含む	良好	ヨコナデ・タテナデ	ヨコナデ	胴部5YR7/8橙 脚部7. 5YR8/6浅黄橙	胴部5YR7/8橙 脚部7. 5YR8/6浅黄橙
第6図	3	玉泉館744	土師質	甕	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第6図	4	玉泉館743	土師質	甕	2mm程度の白色砂粒を含む	良好	回転ナデ・カキメ・ナデ	ナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第6図	5	玉泉館748	土師質	甕	1mm程度の白色砂粒を含む	良好	回転ナデ・静止ヘラケズリ	回転ナデ	7. 5YR8/8黄橙	7. 5YR8/8黄橙
第6図	6	玉泉館740	土師質	長頸壺	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	回転ナデ後ヨコナデ・ナメナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第6図	7	玉泉館794	土師質	提瓶	1mm程度の白色砂粒を含む	良好	回転ナデ・カキメ・ナデ	回転ナデ	7. 5YR8/8黄橙	7. 5YR8/8黄橙
第6図	8	玉泉館741	土師質	直口壺	1mm程度の白色砂粒を含む	良好	回転ナデ・カキメ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第6図	9	玉泉館752	土師質	器台	1~3mm程度の白色砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ・タテナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第6図	10	玉泉館746	土師質	直口壺	0.5~3mm程度の白色砂粒を含む 角閃石を含む	良好	回転ナデ・カキメ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ハケメ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第6図	11	玉泉館780	土師質	無蓋高坏	0.5~3mm程度の白色砂粒を含む 金雲母を含む	良好	回転ナデ・カキメ・不定方向ナデ	回転ナデ	7. 5YR8/8黄橙 5YR7/8橙	7. 5YR8/8黄橙
第6図	12	玉泉館779	須恵器	有蓋高坏	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	良好	回転ナデ・不定方向ナデ・カキメ	回転ナデ	N6/0灰	N6/0灰
第6図	13	玉泉館9487	須恵器	器台	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む 3mm程度の白色砂粒を少量含む	良好	回転ナデ	回転ナデ	N5/0灰	N5/0灰
第6図	14	玉泉館753	須恵器	器台	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	やや不良	ヨコナデ・磨滅	ヨコナデ・タテナデ・磨滅	2. 5Y8/3淡黄	2. 5Y8/3淡黄
第7図	15	玉泉館739	埴輪	円筒埴輪	1~10mm程度の白色砂粒を含む	良好	タテハケ・ヨコナデ	ヨコハケ・ナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第7図	16	玉泉館738	埴輪	円筒埴輪	1~2mm程度の白色砂粒を含む	良好	タテハケ・ヨコナデ	ユビオサエ・ナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙
第7図	17	玉泉館815	須恵器	大甕	0.5~4mm程度の白色砂粒を含む	良好	擬格子タタキ	同心円文当て具	2. 5Y6/2灰黄 2. 5Y3/1黒灰	2. 5YR4/1黄灰

つ可能性もある。沈線の上位には櫛描波状文が施されるが、通常須恵器に施されるものよりも波が非常に小さく、間隔も狭いものである。胴部中位には1条の浅い沈線をめぐらせ、一か所に直径8mm程度の円孔を穿つ。また、沈線の直下と胴部の肩に斜行刺突文をめぐらす。底部はヘラ切り後静止ヘラケズリを行うが、単位は明瞭でない。その他は回転ナデによって調整を行う。胎土は1mm程度の白色砂粒を含むが精良である。成形は須恵器と同様にロクロを用いたものであるが、小形であり、波状文や頸部の形態などは須恵器甕よりも簡略なものである。焼成は土師器と同様のものと考えられ、色調は黄橙色を呈する。

6. 長頸壺(第6図6)

口径6.5cm、頸部径3.6cm、器高10.1cmの長頸壺である。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口縁端部は面取りを行う。胴部は球形で、中位に2条の沈線をめぐらせる。底部外面は回転ヘラケズリによって丸く成形し、その他は回転ナデを施す。ただし、口縁部から胴部中位付近の外面は回転ナデ後ヨコナデを施し、胴部下半部は一部回転ナデ後ナメナデによって調整を行う。胎土は0.5mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、焼成も良好で色調は橙色を呈する。成形はロクロを使用するが、焼成は土師器と同様であろう。

7. 提瓶(第6図7)

口縁部を欠損するが頸部径4.6cm、胴部最大径8.6cm、残存高10.7cmであり、古墳時代後期に通有の須恵器提瓶よりも小形のものである。頸部は回転ナデを施し、ラッパ状に外反する。頸部と胴部の接合部に若干の段を有している。肩部に把手は有さない。胴部は扁平球形を成し、同心円状にカキメ調整を施す。体部背面は回転ヘラケズリ後ナデ調整を施す。胎土は1mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、色調は黄橙色を呈し焼成は良好である。胴部背面の肩部付近に黒斑を有しており、須恵器の生焼け品ではなく土師器と同様の焼成であることを示す。成形は須恵器と同様にロクロを使用するが、通常の提瓶よりも小形で、焼成も須恵器とは異なると言える。

8. 直口壺(第6図8)

口縁部を欠損するが頸部径4.4cm、残存高7.6cmの直口壺である。底部はやや平底気味で安定し、胴部は球形である。頸部直下から胴部上半部までカキメを施し、胴部下半部から底部外面は回転ヘラケズリを行う。底部内面は不定方向ナデを施し、それ以外は回転ナデによる調整である。胎土は1mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、焼成も良好で色調は橙色を呈する。成形はロクロを使用するが、焼成は土師器と同様のものであろう。

9. 器台 (第6図9)

本資料も小田富士雄氏によって既に報告が行われている(小田1972)(第5図7)。底部径10cm, 残存高10.3cmの小形器台である。上部を欠損するため形態は不明であるが、確認できる限りで3段の透かしを施す。最下段に円形透かしを3対施し、その上位に2条の浅い沈線をめぐらせる。中段には円形透かしから6分の1周ずれる位置に長方形透かしを3対施す。更にその上段はほぼ欠損しているが、断面に長方形透かしが続くと思われる切れ込みがあり、中段の透かしと同一線上に3対の長方形透かしが施されていたものと考えられる。脚端は面取りを施し、深い沈線を1条めぐらせる。成形時や沈線を施す際には回転台か回転の遅いロクロを使用した可能性はあるが、最終調整はヨコナデ、一部ヨコナデ後タテナデによるものであり、明確なロクロ使用は認められない。胎土は1mmから3mm程度の白色砂粒を含むが概ね精良であり、焼成も良好で色調は橙色を呈す。器形や意匠は須恵器を模倣したのと言え、焼成は土師器と同様のものであろう。

10. 直口壺 (第6図10)

復元口径10cm, 頸部径8.4cm, 胴部最大径13cm, 器高13cmであり、頸がやや伸びる丸底の直口壺である。古墳時代中・後期にみられる土師器壺の形態と同様である。頸部直下から胴部下半部までカキメ調整を施し、底部外面は回転ヘラケズリを施す。底部内面は回転ナデ後に1cm幅のハケメ工具による調整が施されるが、その他は回転ナデによる調整である。また、頸部中位には2条の沈線がめぐる。胎土は角閃石と0.5-3mm程度の白色砂粒が少量含まれるが概ね精良であり、色調は橙色を呈し焼成も良好である。成形はロクロを使用するが、器形や焼成は土師器と同様のものであろう。

11. 無蓋高坏 (第6図11)

本資料も小田富士雄氏によって報告が行われている(小田1972)(第5図6)。口径10.9cm, 器高14.5cmの無蓋高坏である。坏部は受け部を作らず外に広がり、坏部中位下方に突出部を設けている。突出部より下方にカキメをめぐらす。坏部の底部内面は不定方向のナデを施し、それ以外は回転ナデによる調整である。脚部は中位に2条の沈線をめぐらす、透かしは施されない。脚端部は断面三角形に下方へ突出させている。脚部内外面は回転ナデを施し、脚部内面には絞り痕が確認できる。胎土は0.5から3mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、焼

成も良好で黄橙色を呈する。成形はロクロを使用し、形態も須恵器の無蓋高坏と類似するが焼成は土師器と同様のものであろう。

12. 有蓋高坏 (第6図12)

本資料も小田富士雄氏によって既に報告が行われている(小田1972)(第5図5)。口径12.5cm, 器高17.4cmを測り、灰色を呈する須恵器有蓋高坏である。坏部の蓋受け部立ち上がりは2.3cmで内傾し、口縁端部はやや尖らせるが丸く収めており段は有さない。坏部下方はカキメをめぐらし、底部内面は不定方向のナデ、それ以外は回転ナデによる調整を行う。脚部は同一線上に2段の長方形透かしを3対施し、脚端部は面取りを行っている。脚部内外面は回転ナデを施し、下段にはカキメをめぐらせる。胎土は0.5から1mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、焼成も良好である。

13. 器台1 (第6図13)

樋口隆康氏によって写真が掲載されており、九州における須恵器編年第Ⅱ期の例として取り上げられている(樋口1958)(第3図3)。口縁部が欠損するが、残存高37cmを測る筒型器台である。円柱状の筒部の上方でなだらかに窄んだのち、おそらく大きく外反する口縁部が続くと考えられる。また、筒部の下方には断面台形の脚台部がつく。筒部は5段の透かしを施しており、各段は2条か3条の沈線によって区画される。最上段は円形透かし、それ以下は長方形透かしが各段互い違いに3対配置されている。加えて、最上段には縄蓆文がめぐらされており、それ以下の段には波状文が施されている。また、脚台部には2段の透かしが施され、三角形透かしが互い違いに3対配置されている。内外面は回転ナデによる成形である。胎土は0.5から3mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、焼成は良好で色調は灰色を呈す。

14. 器台2 (第6図14)

残存高26.6cmの須恵器の器台である。上部と底部を欠損するため正確な形態は不明であるが、本来は上部に坏部を有する高坏形の器台であったと考えられる。確認できる限りで4段の透かしを施す。最上段は円形透かしを施し、それ以下は三角形透かしが各段互い違いに3対配置されている。各段に波状文が施されるが、一部摩耗して工具痕のみが残る部分がある。胎土0.5から1mm程度の白色砂粒を含むが精良であり、焼成はやや不良で色調は淡黄色を呈す。

15. 円筒埴輪片（第7図15）

残存高24.3cmで1条の突帯を残す。突帯部の復元径32.2cmで、岩戸山古墳出土の埴輪の中では大型のものであろう（高橋 1976）。透かし孔は円形である。突帯は突出度が弱く、M字状を成すものであり、突帯の上下はヨコナデを施す。外面調整は縦ハケ及び斜めハケを施し、突帯接合時のヨコナデの直上からハケメが開始している。内面調整は断続的なヨコハケを施す。内面及び断面には粘土接合痕が確認でき、内傾接合を行う。胎土は1mmから1cm程度の白色砂粒を含み、焼成は良好で橙色を呈す。

16. 円筒埴輪片（第7図16）

残存高22.3cmで2条の突帯を残す。上位の突帯部の復元径32.4cmで、岩戸山古墳出土の埴輪としては大型の円筒埴輪であろう（高橋 1976）。透かし孔は円形である。突帯はいずれも突出度が弱く、断面は台形かM字状を成すものであり、突帯の上下は強いヨコナデによりへこんでいる。外面調整は縦ハケを施し、突帯下のヨコナデの直下からハケメが確認できる。内面調整は指オサエ・指によるナデを施す。内面及び断面には粘土接合痕が確認でき、内傾接合を行う。胎土は1から2mm程度の白色砂粒を含み、焼成は良好で橙色を呈す。

17. 大甕片（第7図17）

須恵器大甕の肩部付近に位置する破片であろう。外面は擬格子タタキで、内面は同心円に対して垂直方向に亀裂の入った同心円当て具痕が残る。胎土は0.5から4mm程度の白色砂粒を含み、焼成は比較的良好である。外面は口縁部側が灰黄色、底部側が黒灰色を呈し、内面は黄灰色を呈す。

4. 玉泉館旧蔵の土器群の位置づけ

以上の資料報告をもとに、当該資料のうち特に土器群を対象に、年代やその他派生する議論について若干の考察を行うこととした。

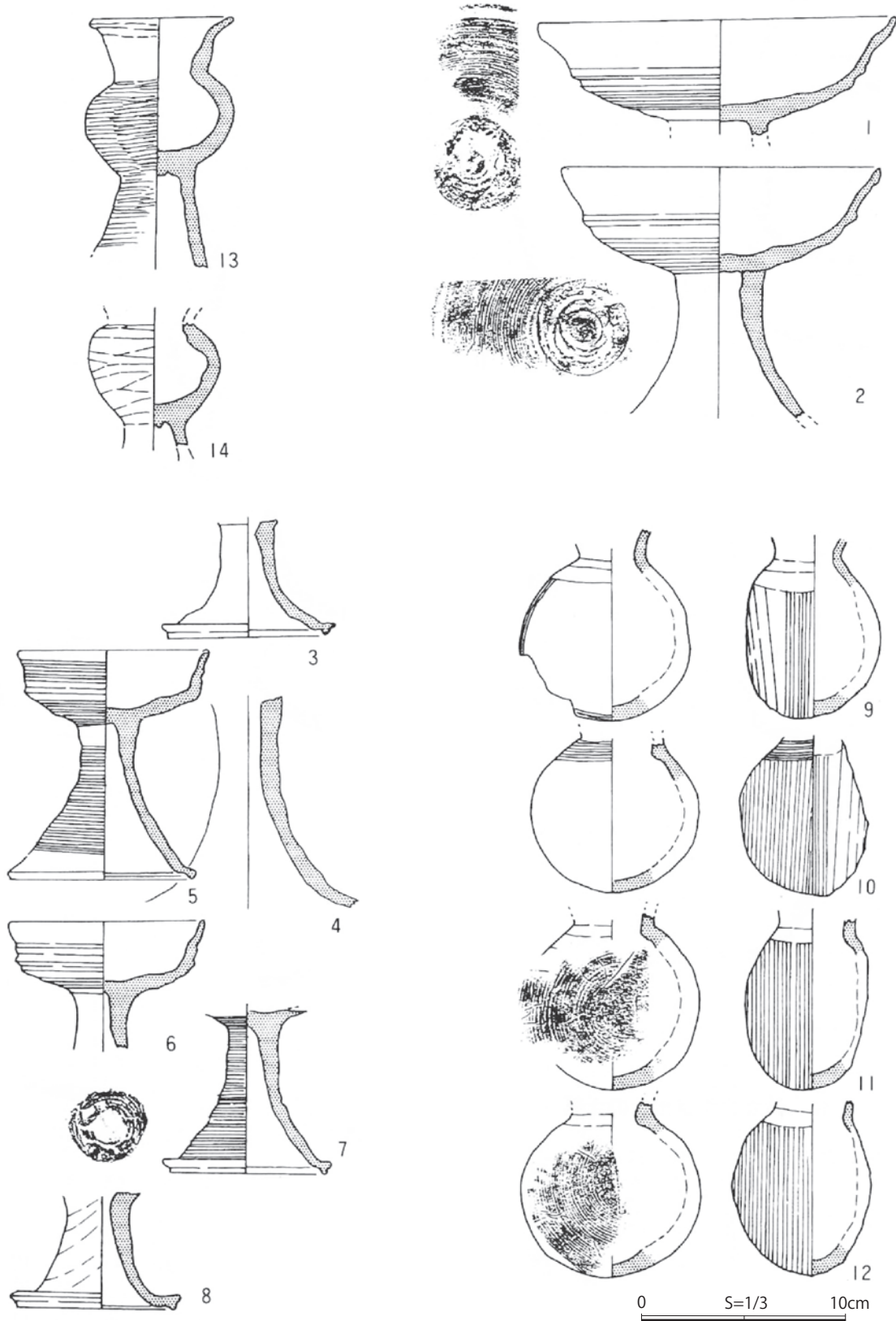
土器群の編年の位置づけを検討するにあたって、当該資料の中で有効であると考えられるものは、高坏類と甕である。有蓋高坏（第6図12）についてみると、長脚2段透かしの脚部を持つことに加え、蓋受け部立ち上がりが比較的高く伸びるものの、口唇部に段を有していないという特徴から、TK10型式期に位置付けることができ

う。また、土師質の土器であるため、その形態を須恵器の編年観にそのまま当てはめて良いかどうかは議論の余地はあるが、無蓋高坏（第6図11）の坏部中位のより下方側に突出部を設けて外に広がるという特徴から、先に示した有蓋高坏よりやや降るTK10～MT85型式期に位置付けておきたい。

甕1から甕3（第6図3-5）は、いずれも小形で土師質の土器であり、口縁部や頸部の上位付近を欠損する。そのため須恵器編年との対応による厳密な年代的位置づけは難しい。しかし、胴部径に対する頸部の締まりが強いことから、少なくともMT15型式期よりは後出するものであり、TK10～MT85型式期にあたるものであろう。TK43型式期段階まで降るかについてはここでは断定を避けたいが、降る可能性は否定できない。

以上、高坏と甕をもとに年代の位置づけをおこなった。決定的な位置づけとは言い難いが、いずれにしても当該土器群はTK10からMT85型式段階に所属し、TK43段階にまで降る可能性を指摘した。これらは岩戸山の築造年代から降るものであることから、土器類の供献は岩戸山古墳の築造後も継続して行われ（小田 1972）、おそらく墓前祭祀が行われていたものと考えられる。

更に注目できる点として、岩戸山古墳に後続すると目される乗場古墳にも、類似した土師質の土器群が供献されていることが挙げられる（中村 1997）。乗場古墳は明治から大正頃に横穴式石室が開口し、その際に出土した遺物と、太平洋戦争後の開墾などによって発見された遺物が存在する（小田 1972）。それらの資料は現在の東京国立博物館、福島高校、九州大学考古学研究室に保管されており、そのうちの一部が小田富士雄氏と中村浩氏によって報告されている（小田 1972、中村 1997・1999）。特に、東京国立博物館所蔵の土器類については中村氏が報告を行っている。氏が報告した土器群のほとんどは、須恵器の器形と製作技法を持ちながらも焼成は土師質のものであり、その器種は高坏、甕、提瓶、長頸壺である（第8-10図）。また、ミガキを施して漆を塗布した脚付壺も報告されており、いずれも本稿で報告した玉泉館旧蔵資料と類似するものである。特に、甕について着目すると、小形で頸部が締まりラッパ状に開くといった形態や、非常に波の小さい波状文を施す点など、特徴を共有していることが指摘できる。また、無蓋高坏についても、脚端部が断面三角形に下方へ突出するといった特徴を共



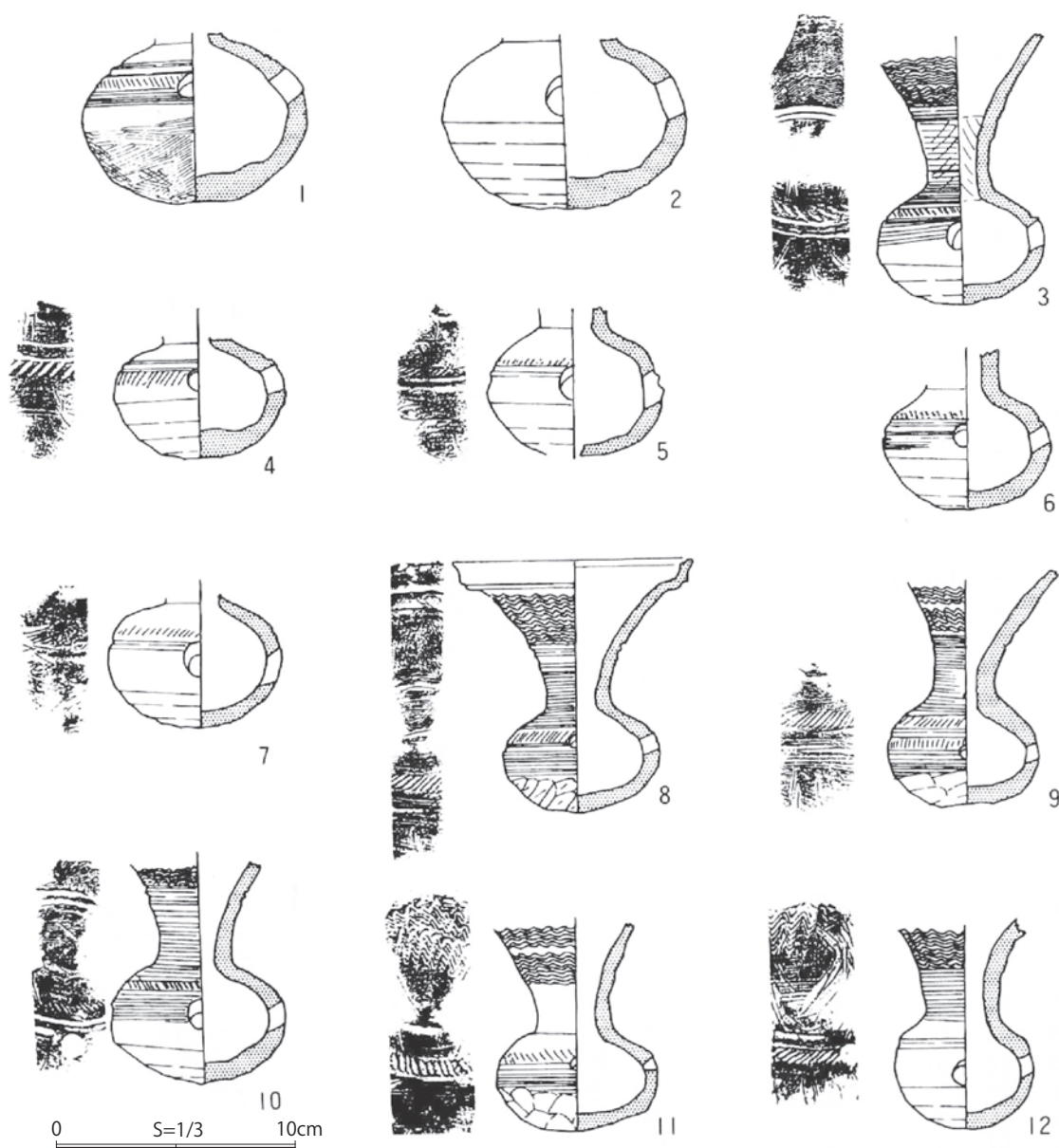
第8図 乗場古墳出土の土器① (中村 1999)



第9図 乗場古墳出土の土器② (中村 1999)

有しているようである。第6図1のように丹を施した脚付壺は乗場古墳例には確認できないものの、岩戸山古墳では漆を塗布したものが出土しており、この点でも類似性が指摘できる。乗場古墳は岩戸山古墳よりも後出すると位置付けられる古墳ではあるが、以上にみた土師質の土器群に関しては明確な時期差を看取することはできず、むしろ細部の特徴も一致するものが多いことから、岩戸

山古墳と乗場古墳へのこうした土器の供献はほぼ同時期に行われたものではなかろうか。乗場古墳の被葬者を具体的に誰に比定するかといった問題には現状で答えることは難しいが、いずれにしても、埋葬された筑紫君一族への土器供献と墓前祭祀として、須恵器の器形と製作技法をもちながらも小形で土師質の土器群が採用されたということができよう。



第10図 乗場古墳出土の土器③ (中村 1999)

5. おわりに

本稿では、玉泉館旧蔵資料のうち福岡県八女市所在の岩戸山古墳出土資料の報告を行った。また、散発的に報告されてきた土器群についても掲載することで、岩戸山古墳という学史的に重要な古墳における土器供献の様相を把握するための基礎資料を提示した。

当該資料群は須恵器の器形と製作技法をもちながら小型で土師質のものが多く含まれ、潜在的に様々な議論の余地のある資料と言える。乗場古墳例と合わせて検討することで、こうした土器群は筑紫君へ奉仕的に生産・供

献された可能性があることが指摘したが、その生産を誰が担ったのかについては本稿では明らかにすることができなかった。特に、岩戸山古墳に近接する八女窯跡群のうち、中尾谷窯跡群はTK10からMT85型式期の前後で生産が行われているようである。須恵器の技法を用いる当該土器群の年代と、ほぼ同時期に須恵器窯が開窯している点は、生産工人集団の性格を考える上で興味深い。また、本稿で示した脚付壺(第6図1)は、近年類例が蓄積されつつある。本稿では類例の集成を行うことができなかったが、脚付壺のうち特に黒彩されたものを集成した福田氏は、装飾古墳の展開にみられるような首長層の

ネットワークとの関連を指摘している（福田 2018）。土器を用いた祭祀にみられる地域性など、派生する議論は多いものとする。

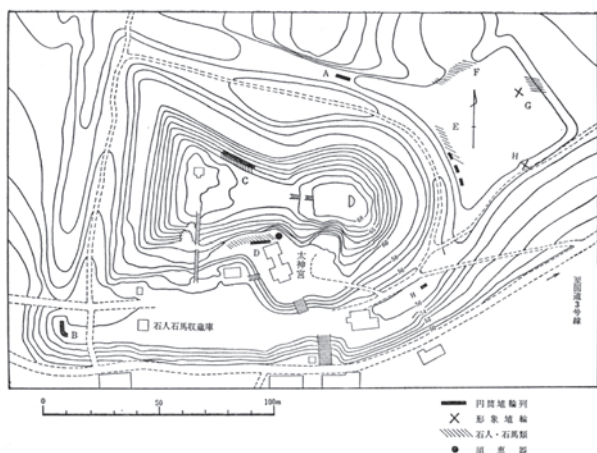
更に、本稿では須恵器の器台や埴輪片についての検討を加えることができなかった。上記の検討事項も合わせて、今後の課題としたい。

謝辞

本稿をなすにあたり、九州大学総合研究博物館の福永将大先生には大変な便宜を図っていただき、多くのご助言・ご指導をいただいた。また、九州大学比較社会文化研究院の溝口孝司先生、九州大学人文科学研究院の辻田淳一郎先生にも、多くのご助言・ご指導をいただいた。末筆ではございますが、記して感謝申し上げます。本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2136の支援を受けたものです。

注

- 1 玉泉館旧蔵資料は、玉泉大梁氏（旧制福岡高等学校 教授）が収集した資料と、その他の人物からの寄贈資料から構成される。現在は九州大学総合研究博物館に収蔵されており、2021年からは資料のデータベースが公開されている。当コレクションの来歴・概要や資料再整理の経緯については谷澤・岩永 2021に詳しい。
- 2 大神宮再建時にどの程度の範囲を掘り下げたのか、また、土器群が出土した具体的な位置は不明であるが、森貞次郎氏が「須恵器発見位置」を図面に書き入れている（第11図）。この図によれば、土器群の発見された位置は後円部側に近いくびれ部ということになり、石室の開口部が南側くびれ部の方向を向くと想定した場合に、土器群が墓前祭祀に使用された



第11図 岩戸山古墳測量図と遺物の発見位置（森 1977）

蓋然性が高まると言える。

- 3 中尾谷窠跡の調査報告書において、小田富士雄氏が「石人堂にあった散逸前の須恵器実測図が岡崎敬氏によって作成され、梅原末治博士の手元に原図が所蔵されている」と記載している（小田 1970）。現在その原図がどこに所蔵されているかについて、本稿では明らかにすることができなかった。
- 4 高橋徹氏・小林昭彦氏は岩戸山古墳出土の高坏型器台・筒型器台について詳細な型式学的検討を加えている。その結果、小田編年（小田 1964など）のⅢB期併行である可能性を指摘した。重要な指摘ではあるが、その後の九州における須恵器編年の進展なども考慮し、器台とその他の器種との共存関係の厳密な検討を加えた上で、氏らが作成した器台の変遷観について再度議論を行う必要がある。
- 5 当該資料は既に樋口隆康氏によって岩戸山古墳出土品として紹介されているものである（樋口 1958）。現状では岩戸山古墳出土と断定することはできないが、本稿においてはその他の岩戸山古墳出土資料と合わせて報告しておく。
- 6 円筒埴輪片2点については1924年の地下げ工事時に出土した遺物群とは関連しない可能性もあるが、工事の際に円筒埴輪4～5点も出土したと記載されていることから（福岡県 1925）、関連を否定することはできない。

参考文献

- 梅原末治・小林行雄 1940 『筑前国嘉穂郡王塚裝飾古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告 第15冊，桑名文星堂
- 小田富士雄 1964 「九州の須恵器序説—編年の方法と実例（豊前の場合）—」『九州考古学』22，九州考古学会，pp.12-15.
- 小田富士雄 1970 「Ⅲ八女古墳群発見の須恵器集成」『中尾谷窠跡群』八女古窠跡群調査報告Ⅱ，八女市教育委員会，pp.28-37.
- 小田富士雄 1972 『立山山窠跡群』八女古窠跡群調査報告Ⅳ・総集編，八女市教育委員会，pp.65-67.
- 大場磐雄 1948 『日本考古学新講』あしかび書房
- 九州考古学会（編）1951 『北九州古文化図鑑』第2輯，福岡県高等学校教職員組合
- 古賀寿 1959 「筑後八女市岩戸山古墳の祭祀用土器」『九州考古学』7・8，九州考古学会，pp.4-5.
- 佐田茂（編）1972 『岩戸山古墳—環境整備事業に伴う基礎的調査の報告』八女市教育委員会
- 斉藤忠 1955 「7. 宝器と呪物と祭祀遺品（4）」『日本考古学図鑑』吉川弘文館，pp.87-88.
- 高島忠平・西弘海 1971 「その他の調査」『奈良文化財研究所年報』奈良文化財研究所，pp.45-49.
- 高橋徹 1976 「Ⅶ九州の埴輪概観」『二子塚遺跡—久留米市荒木小学校内遺跡発掘調査報告—』久留米市開発公社，pp.43-50.
- 高橋徹・小林昭彦 1990 「九州須恵器研究の課題—岩戸山古墳出土須恵器の再検討—」『古代文化』42（4），古代学協会京都支部，pp.28-43.

- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 谷澤重里・岩永省三 2021「玉泉館旧蔵考古資料—近年の再整理を経ての資料紹介—」『九州大学総合研究博物館研究報告』18, 九州大学総合研究博物館, pp.51-63.
- 中村浩 1997「福岡県八女市乗場古墳出土土器の検討：東京国立博物館所蔵の須恵器・土師器について」『考古学雑誌』81-3, 日本考古学会, pp.365-385
- 中村浩 1999『古墳時代須恵器の生産と流通』雄山閣
- 橋口達也 1982「2. 北部九州におけるいわゆる「赤焼土器」について」『野間窯跡群』岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集, 福岡県教育委員会, pp.82-86.
- 橋口達也 1989「似非土師須恵器」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集 I, 横山先生退官記念事業会, pp.251-272.
- 波多野皖三・小田富士雄 1964「筑後・岩戸山古墳新発見の埴輪列、石製品の調査」『九州考古学』20・21, 九州考古学会, pp1-10.
- 樋口隆康 1955「九州古墳墓の性格」『史林』38 (3), 史学研究会, pp.178-260.
- 樋口隆康 1958「須恵器」『世界陶磁全集』, 座右宝刊行会, pp.192-206.
- 福岡縣 (編) 1925「(ロ) 岩戸山古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯, 福岡縣, pp.27-33
- 福岡縣 (編) 1939「漆を塗れる土器其他」『史蹟名勝天然記念物報告書』第13輯, 福岡縣, pp.23-24.
- 福田匡朗 2018「古墳時代後期の黒彩された土師器について—筑前・筑後・肥後を中心として」『古文化談叢』第80集, 九州古文化研究会, pp.135-144.
- 水永秀樹 1996「電気探査法による遺跡のイメージリング」『遺跡探査』第4回研究成果検討会議論文集, 重点領域研究遺跡探査総括班, pp.231-258.
- 森貞次郎 1956「筑後風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」『考古学雑誌』41 (3), 日本考古学会, pp.19-34.
- 森貞次郎 1970『岩戸山古墳』美術文化シリーズ 中央公論美術出版
- 森貞次郎 1977「六 磐井の反乱—古墳文化からみた磐井の反乱—」『古代の地方史1』西海編, 朝倉書店, pp.153-195.
- 柳沢一男 2014『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」094 新泉社

Received Jan. 19, 2023; accepted Jan. 20, 2023



第 12 図 1



第 12 図 2



第 12 図 3



第 12 図 4



第 12 図 5



第 12 図 6

写真 1 玉泉館旧蔵岩戸山古墳 資料①



第13図1



第13図2



第13図3



第13図4



第13図5



第13図6

写真2 玉泉館旧蔵岩戸山古墳 資料②



第14図1



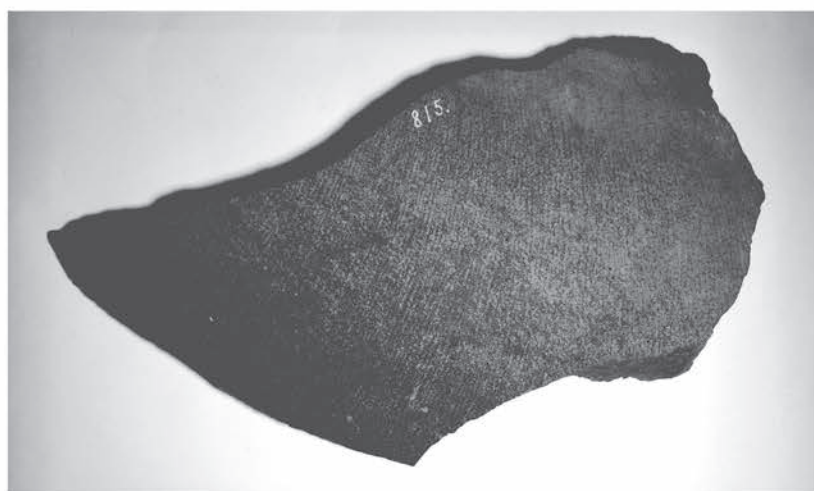
第14図2



第14図3



第14図4



第14図5

写真3 玉泉館旧蔵岩戸山古墳 資料③

Pottery and Haniwa from Iwatoyama Tumulus in the *Gyokusen-kan* Collection

Yuki ADACHI

Graduated School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University
744 Moto-oka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

This paper reports on materials from the Iwatoyama Tumulus located in Yame City, Fukuoka Prefecture, among the *Gyokusen-kan* Collection. It is possible that the pottery was excavated from near the opening of the horizontal stone chamber. These are from the TK10 to MT85 type phases when after the construction of Iwatoyama Tumulus, and some of them descend to the TK43 type phase. In addition, the similarity with the pottery excavated from the Noriba Tumulus points out the possibility that the small size pottery, which had Sue ware production techniques and shapes but was oxidizing firing, was adopted as an offering to the *Chikushi-kimi*.

Key words: the *Gyokusen-kan* Collection, report of materials, Iwatoyama Tumulus, *Sue* ware, *Haji* ware

